

報告事項エ

西部地区における病弱特別支援学校高等部の設置等に係る検討状況について

西部地区における病弱特別支援学校高等部の設置等に係る検討状況について、別紙のとおり報告します。

平成24年11月20日

鳥取県教育委員会教育長 横 濱 純 一

鳥取県西部地区における特別支援学校高等部の設置等に係る第1回検討会の概要

特別支援教育課

日 時	平成24年10月31日(水) 9:45～11:45
会 場	西部総合事務所
出席者	検討委員全員出席(※鳥取大学医学部附属病院においては委嘱中)
意見発表者	米子市立湊山中学校 河本校長 本城講師 米子市立米子養護学校生徒及び卒業者の保護者 2名

1 学校・学級の状況

(1) 米子市立米子養護学校

- 皆生にあった国立療養所に入院していた結核の子どものために設置され、国立療養所の入院患者に特化した学校として発足した。長期入院患者が減ってきたため、就学の規程が「療養所での医療を受けていること」に変更された。
- 病弱特別支援学校高等部があれば、進学したいと考える生徒が少なからずいる。現在、高等部がないため、公立高等学校及び私立高等学校の全日制・定時制・通信制に進学している。状況として、休学、退学している生徒がいる。

(2) 米子市立湊山中学校院内学級(鳥取大学医学部附属病院内)

- 鳥大医学部附属病院に入院し、院内学級で中学校教育を終えられる生徒に対して、高等学校教育の場がないのでぜひ設置が望まれる。鳥大医学部附属病院に高校生対象の分教室があれば、治療に専念しながら教育を受けることができる。
- 現在、入級している者は、血液疾患(白血病)・腎疾患(腎臓移植・透析)の治療を受けるため、短期・長期入院をしている児童生徒。西部圏域に限らず、島根県や兵庫県からも来て入院し、入級している。
- 病院で受験をして、県立高等学校(全日制)に合格したが、退院ができないため、学校に通うことなく亡くなられた例もある。現在、中学校を卒業された白血病の方には勉強する場がないので、中学校の院内学級に時々来ていただいている状況。
- 鳥大医学部附属病院に市立米子養護学校の先生に来てもらって院内学級的に教えてもらっている例もある。高等部を例えば皆生養護学校に設置しても鳥大医学部附属病院に入院されている方がそこへ行けない状況もある。

2 保護者の声（米子市立米子養護学校生徒及び卒業者の保護者）

- 将来的に大学へ進学したいという気持ちを持っていたので、定時制の高等学校に入学したが、休みが多くなり退学することとなった。高等学校に通うことの難しさ、単位の取得の難しさを経験し、病弱高等部の必要性を改めて感じた。現在、私立の定時制・通信制高等学校に通っている。
- 病気による不登校の状態にあったが、市立米子養護学校に中学部から入学し、登校できるようになった。一般の高等学校に通うことには、不安がある。わが子は、「なぜ市立米子養護学校に高等部がないのか。」と言っている。
- 高等教育を受けたい気持ちはあるが、病気があり一般の高等学校に通えない子が多くいる。また、進学先が高等学校しかないため、高等学校へ進学して通えなくなった子も多い。通えないために留年となる子もいるが、留年は大きなつまづきである。もう一度がんばろうと思った時に、安心してやり直せる場所がほしい。

3 協議事項

（1）検討の進め方

- 病弱高等部設置の検討をする場合、高等部設置のみで論じることにはできない。全体を見て考えなければならない。長期的な視点から、小中学部のことを含めて今後の道筋を検討すべきである。さらに、院内学級との関係をどうするかなど、まずは枠組みを決めてから高等部設置の検討をしたい。

（2）意見等

- 障がいのある子どもの思春期において、所属（学校）があることの意義は大である。特に、心身症で不登校の状態にある生徒にとって病弱高等部があることは意義あること。ぜひ積極的に病弱高等部設置を進めたい。
- 鳥大医学部附属病院に入院されている高校生年齢の方には、院内学級を分校化して高等学校教育ができるようにする等の検討が必要である。
- 地理的な問題、心身症（不登校傾向の子）の児童生徒への対応、小中高の一貫性、院内学級（中学校）卒業後の高等学校教育のあり方、これらのことが検討する上での要素となる。
- 一言で病弱といっても、鳥大医学部附属病院が行っているような医療を必要とする子もいれば、心身症等で自宅から通学している子もある。隣接する病院の医療の守備範囲によって、どのような子が入学してくるのが決まる。